

「味を表す表現」使用にみられる男女差

—中国語母語話者を対象とした調査から—

武藤 彩加 (広島市立大学・国際学部)

1. はじめに

次の用例はいわゆる「おネエことば」と呼ばれる表現である。

- (1) アタシ,女性誌というのも大嫌いなものよ。女の味方の振りをしながら,バリバリの男尊女卑を垂れ流して、ものすごく傲慢。この間,友人と一緒に受けたアラサーの恋愛相談の仮タイトルって,何だったと思う?真面目に答えたんだけど,「愉快的な女装たち」ってくられて。ふざけるな,ってことよ。そう,アタシたちへの注目って,消費の一環なのよ。でも,それで結構。だって,消費されなければ,アタシみたいな存在は食べていけないもの。(『AERRA』2009/8/31号,朝日新聞出版,p.55.)

阿部(2014)ではこうしたおネエことばを「男性性,女性性の持つステレオタイプ的特徴をことばの中に巧みに生かす言語行為である」と述べている。

2. 先行研究

2.1 目に見える形の男女差

日本語における男女差は,語彙や文法他,はっきりそれと認識できる形のもものが,多くの先行研究で指摘されてきた(国研1951,上野1972,田中1973,杉本1975,寿岳1979,井出1983,Makino & Tsutsui1986,堀井1990,益岡・田窪1992ほか)。目に見える形の男女差として,従来の研究で挙げられているのは次のような項目である。

- | | |
|--------------------------|-----------------------------|
| a. 終助詞(文末表現) | g. 敬語(ていねいさ) |
| b. 呼称(1人称,2人称,3人称) | h. パラ言語 |
| c. 音変化(促音化・長音化・音便化) | i. 聞き手の性別(社会的地位) |
| d. イントネーション | j. その他(呼びかけ,言いよどみ,繰り返しの表現等) |
| e. 語彙(副詞,「お」,～じゃん,奴,食う等) | |
| f. 文法(主語の欠如,格助詞の欠如,体言止め) | |

2.2 男女差に関する意識調査

また小川(2001)では,大学生がことばの男女差を実際どのように意識しているのかを調査し,たとえば「日本語の話し言葉には男女の違いがあると思うか」という質問に対し,あると回答した者が57.2%,また,「日本語の話し言葉に男女の違いがあるとする,どういう場面・表現・言葉遣いなどにあらわれていると思うか」という質問には,「言語上の特徴」とする回答が最も多かったとした(61.8%)。その内訳は,終助詞,呼称,語彙,敬語,パラ言語,イントネーション,音変化,文法などである。このように,大学生を対象とした調査では,日本語には男女差があると感じている日本語母語話者は半数以上にのぼり,それは言語上の特徴など「目に見える形」のものであるとする回答が最も多かったという。

2.3 言語使用の中性化と役割語

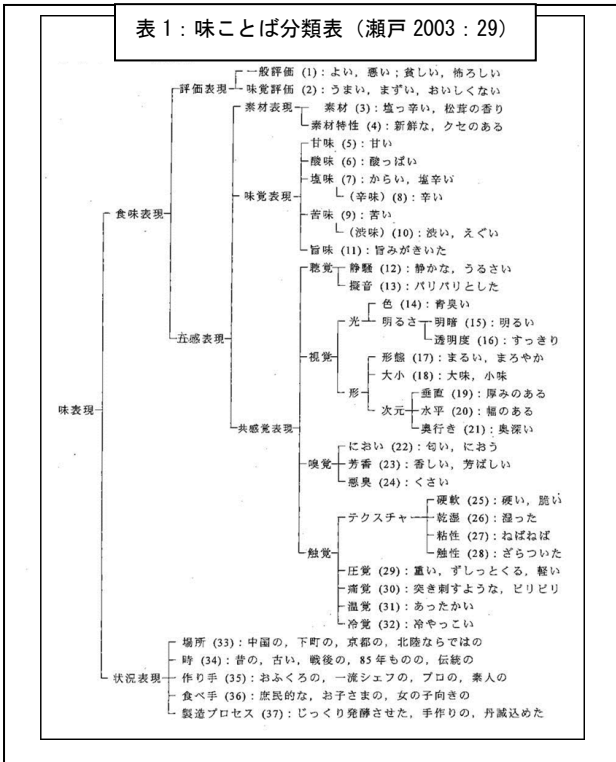
一方で,とりわけ会話においては,20代の女性の言語使用は「中性化」しているとされ(小林1993),話し言葉の性差による束縛が緩み,若い男女のことばの性差が縮まっているとされる(メイナード2001:31)。そして,従来,言葉の性差とされてきた表現は,小説や映画,テレビドラマ等に登場する,いわゆる女性(男性)キャラが使用する「役割語」になりつつあるという(金水2003)。

3. 本研究の課題

以上でみた日本語における男女差は,「研究者・辞書の定義する男女差(定義),一般の人が描いている男女差(意識)」(小川2001)が主なものであり,話者自身に意識されていない現象について言及した研究は少ない。本研究は,話者自身に意識されていない潜在的な男女差があると仮定し,そのような表現を「気づかれにくい男女差」と呼び,その使用実態について考察する。実際の使用場面で現れる男女差をとらえるため,この調査では食品の味を表す場面に焦点を絞り,そこに潜在的な男女差が現れるのかどうか,中国語母語話者を対象とした調査の結果に基づき,以下で検証する。

4. 考察

4.1 中国語母語話者を対象とした調査の概要



話者自身にも意識されない「男女差」とはどのようなものか、そしてそれはどのような場面で現れるのか。この課題について検証すべく、中国語母語話者を対象とし「中国語における味の表現使用実態」について調査をした。調査の概要は以下のとおりである。

- 調査時期：2015年9月
 - 調査地：上海市, 北京市, 重慶市における3つの大学
 - 対象人数：男性34名, 女性42名 (計76名)
- 調査方法は自由記述式で, 150食品のリストの中の, 各々の食品について「その味を表現するのに中国語ではどのような表現があり得るのか」を自由に書くよう依頼した。

4.2 分析の枠組み

この調査で, 1,423種類の中国語の味表現を得た (回答数は11,108)。次いでこれらのデータを瀬戸 (2003)の「味ことば分類表」(表1)により分類した。

4.3 考察

分類の結果, おいしさを表す際の表現のバラエティ (種類) には男女差があまり見られず, 男性・女性とも,

食品の「甘み, 芳香, 硬軟」においしさを感じるという共通の結果を得た。(図1)。

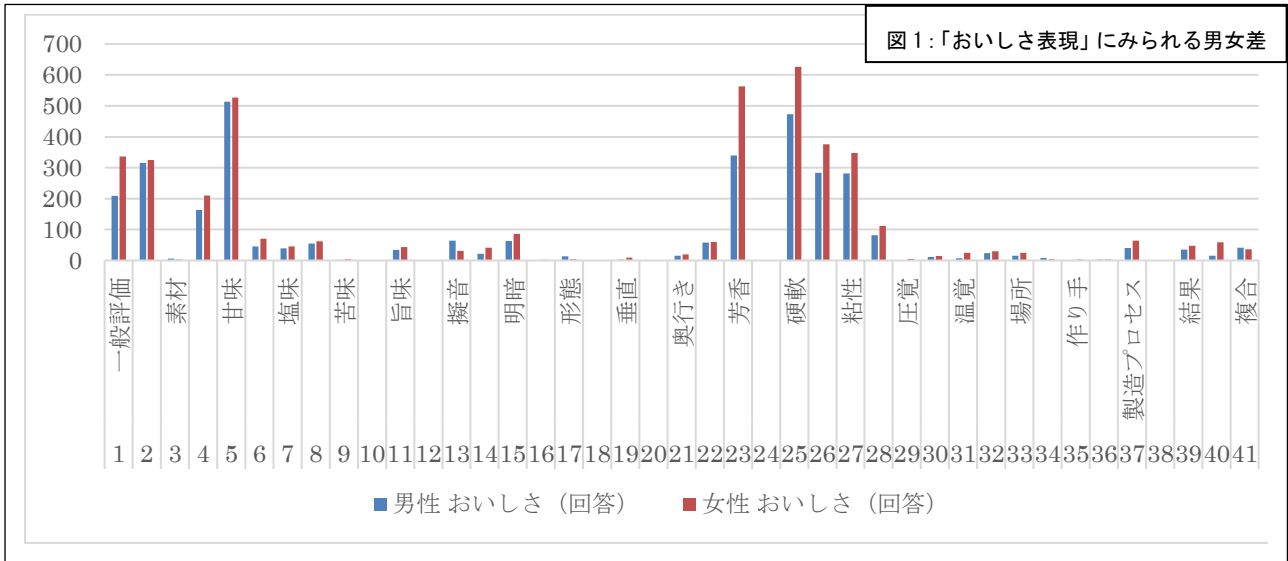


表 2: 「おいしさの表現」上位 10 表現

男性				女性			
中国語	回答数	日本語	カテゴリー	中国語	回答数	日本語	カテゴリー
香	167	いい匂い	芳香(23)	甜甜的	176	甘みがある	甘味(5)
甜	108	甘い	甘味(5)	香甜	168	甘くて美味しい	甘味(5)
甜甜的	105	甘みがある	甘味(5)	脆脆的	155	さくさく	硬軟(25)
香甜	98	甘くて美味しい	甘味(5)	有嚼劲	113	歯ごたえがある	硬軟(25)
有嚼劲	88	歯ごたえがある	硬軟(25)	香	112	いい匂い	芳香(23)
美味	77	美味	味覚評価(2)	爽口	107	爽やかな味	一般評価(1)
脆脆的	61	さくさく	硬軟(25)	可口	104	口に合う/美味しい	味覚評価(2)
可口	60	口に合う/美味しい	味覚評価(2)	香喷喷	101	香ばしい	芳香(23)
脆	58	さくさくの歯ざわり	硬軟(25)	香香的	99	匂いが美味しそう	芳香(23)
爽口	50	爽やかな味	一般評価(1)	新鲜	95	新鮮な	素材特性(4)

以上のような共通点がみられる一方で、まずさを表す際には相違がみとめられた。特に「硬軟」を表す際や「悪臭」, 「粘性」を表す際などに違いがみられる (図 2)。

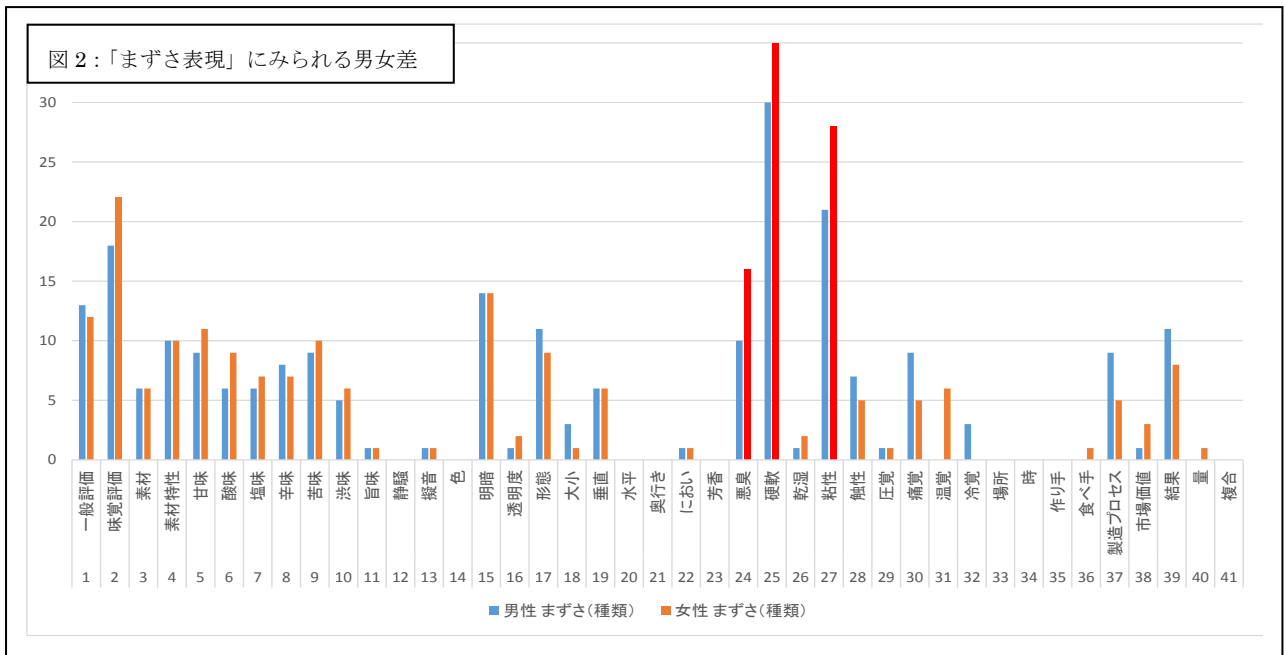
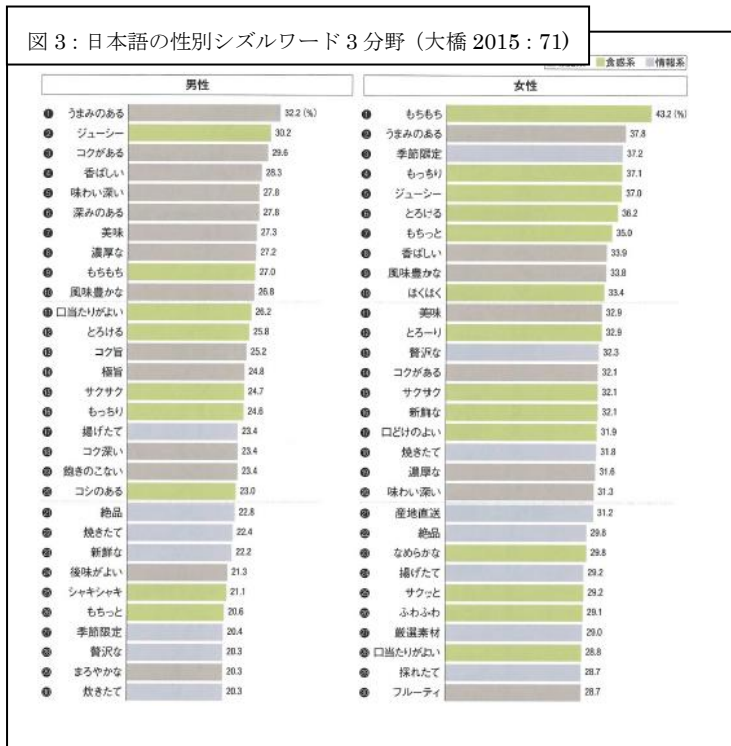


図 2 が示すように、女性の方が、悪臭を表す際や、硬軟や粘性等、食感（テクスチャー）に関する語彙をより様々に使用するが、男性は固定された表現を繰り返し使用する傾向がある。なお、硬軟を表す表現とは「硬硬的, 太硬, 硬, 硬邦邦」(全ておおよそ「硬い」の意), そして「口感差」(食感がよくない) 等の表現をいう。一方、まずさを表す際にも男女の共通点が認められたが、それは、甘すぎることもまずさの原因となることと、乾ききったもの、油っこいもの、味が無いものに対しても男女共にまずさを感じやすいという点である。日本語については大橋(2015)に詳しい分析があり、女性は「もちもち, とろける」等の食感系の表現が使用されやすいという報告があるが、これは本調査の結果と似通っている。さらに武藤・副島(2012)においては韓国語話者を対象とした調査の結果に基づき「女性の方が食感の表現をより様々に表現する」という同様の指摘がある。



5. おわりに

小川(2001)では、「日本語教育で話し言葉の男女差をどう教えるか」という課題について、「誤った使い方では、相手が不愉快な気持ちを引き起こしかねない」とし、「上級以上の学習者には、男女差があるという事実は、必要な知識として教えるべき」だとする。大橋 2015 の指摘通り、日本語においては「女性の方が食感（テクスチャー）をより様々に表現するならば、それははたして日本語だけにみ

られる現象なのだろうか。本調査は、年齢層も調査対象者の身分も限定された範囲のものではあるが、今回の結果においては中国語においても「女性の方が、硬軟や粘性等、食感（テクスチャー）に関する語彙をより様々に表現する」という可能性が示唆された。先述の通り、韓国語においても、同様の指摘がある。こうした「実際の使用場面で現れる男女差」、つまり話者自身にも意識されない「潜在的な男女差」が、味を表す際に現れるのかどうか、そしてそれは言語の違いを超えて共通して存在する傾向なのかどうか、今後も調査を続け明らかにする。

<謝辞>本発表は、科学研究費補助金、基盤研究（C）「複数の言語における『味を表す表現』に関する研究」〔課題番号 #24520473（研究代表者：武藤彩加）〕における研究の一部である。

【参考文献】

- (1) 阿部ひで子ノース (2014), 「ゲイ/オネエ/ニューハーフのことばー男性語と女性語のあいだ」『日本語学』33-1, 明治書院, pp. 44-59.
- (2) 井出祥子 (1983), 「女性の話しことば」, 『話しことばの表現』, 筑摩書房, pp. 174-193.
- (3) 上野田鶴子 (1972), 「終助詞とその周辺」, 『日本語教育』17, pp. 62-77.
- (4) 大橋正房他編著(2010)『「おいしい」感覚と言葉 食感の世代』, 株式会社 B/M/FT 出版部.
- (5) 大橋正房(2015)『シズルワードの現在 「おいしいを感じる言葉」調査報告』, 株式会社 B/M/FT 出版部.
- (6) 小川小百合 (2001), 「話し言葉の男女差ー定義・意識・実際ー」, 『日本語とジェンダー』4, 日本語ジェンダー学会, pp. 26-39.
- (7) 金水敏 (2003), 「ヴァーチャル日本語 役割語の謎」, 岩波書店.
- (8) 小林美恵子 (1993), 「世代と女性語ー若い世代のことばの「中性化」についてー」, 『日本語学』5-12, pp. 181-192.
- (9) 国立国語研究所 (1951), 『現代語の助詞・助動詞ー用法と実例ー』, 秀英出版.
- (10) 寿岳章子 (1979), 『日本語と女』, 岩波書店.
- (11) 田中章夫 (1973), 「終助詞と間投助詞」, 『品詞別日本文法講座9 助詞』, 明治書院.
- (12) 瀬戸賢一(2003), 『ことばは味を超える 美味しい表現の探究』, 海鳴社.
- (13) 泉子 K・メイナード (2001), 「恋するふたりの感情ことばードラマ表現の分析と日本語論ー」, くろしお出版.
- (14) 副島健作・武藤彩加 (2013), 「日本語学習者による『テクスチャー（食感）表現』の使用」, 『東北大学高等教育開発推進センター紀要』8, 東北大学高等教育開発推進センター, pp. 27-38.
- (15) 早川文代他(2004), 「中国語テクスチャ表現の収集と分類」, 日本食品科学工学会誌 51, 日本食品科学工学会, pp. 131-140.
- (16) 早川文代(2006), 「テクスチャー（食感）を表す多彩な日本語」, 『豆類時報』52, 日本豆類基金協会, pp. 42-46.
- (17) 堀井令以知 (1990), 『女の言葉』, 明治書院.
- (18) Makino Seiichi & Tsutsui Michio (1986), A Dictionary of Basic Japanese Grammar, The Japan Times.
- (19) 益岡隆志・田窪行則 (1992), 『基礎日本語文法ー改訂版ー』, くろしお出版.
- (20) 武藤彩加(2010), 「スウェーデン語における『味を表す表現』の収集と分類」, *JCLA Conference Handbook*, 日本認知言語学会, pp. 169-172.
- (21) 武藤彩加(2013), 「韓国語における『味を表す表現』の収集と分類」, 韓国日本語学会第27回学術発表会論文集, 韓国日本語学会, pp. 84-90.
- (22) 武藤彩加 (2003), 「味ことばの擬音語・擬態語」, 『ことばは味を超える』, 海鳴社, pp. 241-300.
- (23) 武藤彩加・副島健作(2012), 「テクスチャー（食感）表現使用にみられる男女差について」, 言語文化学会第26回大会(2012年12月8日)ハンドアウト, 於阪南大学.